

令和7年度富山県美術館運営委員会 議事抄録

日時：令和7年 11月28日（金）14:00～15:30

場所：富山県美術館3階ホール

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 議題

(1) 協議事項

委員長および副委員長の選出

(2) 報告事項

- ① 令和7年度 展覧会事業について
- ② TAD ギャラリーについて
- ③ 教育・普及活動について
- ④ 作品収集について
- ⑤ 広報、管理運営等について

(3) 意見交換

今後の富山県美術館の運営について（意見交換）

- 4 閉会

主な意見要旨

【A 委員】

企画展「東野芳明と戦後美術」は、この館の元々のアイデンティティを回顧するとともに、調査に基づいた企画内容は、学芸員の方々の活躍がみえるものであった。

「絵本のひみつ」は、絵本原画が絵画作品として本当にレベルが高く、観覧した方たちから楽しかったという声を多く聞いた。

「ポップ・アート」と「国立美術館コレクション・プラス」の同時開催は、企画展とコレクション展の内容の関係性や、展示観覧の回遊性があったことがとても良かった。この同時開催により、富山県美のコレクションの特徴と優れた作品を有していることが

際立ち、県民として誇らしい気持ちになった。

企画展とコレクション展が回りやすい動線になっていると高齢者にはありがたい。また鑑賞の合間に休憩するスペースや、トイレ・水分補給の導線がうまく組み合わせられていると、時間をかけてゆっくり楽しめる。更なる工夫を望む。

【B 委員】

企画展の内容によって、観覧者数がこれだけ変わるのかと率直に感じた。

教育普及活動では、子供たちが楽しめる内容を豊富に取りそろえていることに感銘を受けた。幼児を中心とした内容が多い印象があり、アートや美術への関心が出てくる小・中学生向けの企画が夏休みなど子ども達向けのシーズンに充実すると、親世代の一人として嬉しい。

インバウンドの来館がどのくらいあるのか、どこの国の方がどのような展示に興味を持っているのか気になった。翻訳ツールの活用など、インバウンド向けの対応は今後さらに重要になると感じる。

【C 委員】

今年度は4つの企画展が開催されているが、展覧会によって1日あたりの観覧者数にかなり差がある。自分が観に行きたいと感じる展覧会は、例えば音楽をしているのでビートルズとつながりのある「ポップ・アート展」に興味を持つといったように、関心のある分野とのつながりがある。各展覧会を別の分野と絡めることで、関心を持ってもらえる層が広がるのかもしれないと感じた。

企画展のタイトルだけでは企画展の特徴が伝わらず興味を持てないものもある。企画展の内容や魅力、訴求点がしっかりわかるよう広報されると良い。

【D 委員】

素晴らしいコンテンツがあり、知っていたら見に行きたかったものもある。

来館者を増やしていくのは大切だが、美術館が現状をどのように受け止めているのか、企画展ごとの観覧者数の違いを検証しているのか関心がある。

芸術にあまり関心がない人たちが、美術館に来て芸術に触れることで興味を持つ、学校教育の早い時期のような形ができれば良い。広報を強化する必要があるが、インフル

エンサーとの連携は、単発の発信ではなく、例えばアンバサダーのようにイベントごとの楽しみ方を継続して発信すると効果的では。「休日や時間のある時にふらっと美術館に行ってみる」というような富山に美術館があるからこそその楽しみ方を伝えてほしい。

【E 委員】

美術館にとってコレクションは宝である。企画展目的の来館者は多いが、コレクションの魅力大切に、コレクションを巡るだけでも、日常使いのように来館があるのが理想的。国立美術館の所蔵品を交えた展示企画「国立美術館コレクション・プラス」は、「この美術館はこういう良いものを所蔵している」という価値を伝える機会である。

新収蔵作品も優れている。特に、新たに加わった上甲ミドリ氏の旧所蔵作品・資料は、富山県美術館がこれまで注視し、コレクションでも充実を図ってきた戦後美術を考えるうえで重要である。コレクションを組み合わせれば、良い展覧会ができると思う。

観覧者・入館者増の伸びしろとしては、他の委員の方からも意見があったように、インバウンドの来館者に関する事項がある。海外のお客様向けにどのような方策を考えているのかが気になった。

【F 委員】

企画展に関しては、バランスよく、全体として全方位的な構成がされていると思う。

「東野芳明と戦後美術」は、学芸員渾身の展覧会であり、コレクションもふくめ、地域に根ざした非常に重要な展覧会であった。

企画展とコレクション展の観覧者数が拮抗しているということは、コレクションが充実しており、素晴らしいことを示している

特に、「国立美術館コレクション・プラス」は、コレクション展の充実した見せ方とともに、さらに企画展と関連づけて開催されたことに、非常に意義がある。

教育普及は、幼児に目が行き届いた素晴らしいプログラムであり、県外者としてはうらやましい。今後の博物館の使命として、インクルーシブが叫ばれている。高齢者や障がいのある方に対する取り組みの予定や現状、計画があればお聞きしたい。

チケットの電子化は、インバウンドの方も利用しやすくなる。現代の課題に対応された取り組みだと思う。

【G 委員】

毎年「コレクションがもっと見たい」とお願いしているが、今年は「国立美術館コレクション・プラス」などコレクションの展示機会が多く、とても嬉しい。他の委員の発言にもあったが、企画展とコレクション展を、関連性を持って楽しむことができ、この美術館らしさを感じた。

コレクション展の上甲ミドリ氏旧所蔵品の展示は、学芸員が時間をかけて研究し、ようやく展示できる状況までもってきたことを、ギャラリートークで知った。堅実な内容だが、この美術館らしい良い展示。多くの人を呼ぶ展示ももちろん大事だが、このような展示や東野展も、とても良い方向だと思う。

オープンラボでもインバウンドの方が増えている。言葉の壁があっても、身振り手振りで楽しめ、好評。参加無料であることに驚かれる。今後も沢山来てくださると良い。

【H 委員】

令和8年度の企画展スケジュールは、楽しみな内容。

富山県美術連合会では、開館以来、TAD ギャラリーでの「3つのシンフォニー」で美術連合会の各部門の作家を開催している。「県展新人賞受賞者展」の開催とあわせて、大変ありがたい。

「3つのシンフォニー」は、回を追うごとに展示内容が充実し、楽しい展覧会になっている。例えばワークショップなどでも、県内作家が何かの形で関われば良い。

【I 委員】

学校関係では、既に校外学習で多数訪れているが、最近は熊の影響で宿泊学習での屋外活動が難しく、美術館で見学やワークショップなど代替の活動ができると良い。学校に行きづらい不登校児童が増えており、デジタルやバーチャルメディアで、美術が好きな子供が社会と繋がりやすくなる仕組みがあれば良い。作品に触れることができたり、騒いだりしてもよい企画があっても楽しい。アウトリーチとして、学芸員が学校の作品展で子供たちの作品解説をする機会があれば保護者に喜ばれる。

インクルーシブの観点では、高齢者が集いたい場とするというのも一つの支援だと思う。また、働く人が仕事の後に美術館に立ち寄ることのできる機会が増えると良

い。都市圏では、金曜日は8時まで開館している美術館がある。

周知・集客には、今の時代、メディアやSNSなど様々な媒体と上手に連携することが大事。水墨美術館の展覧会で「時間限定で作品を撮影可能」という企画があった。写真撮影をしたら発信したくなり、それを見て行きたい人が出てくる。婚活の場としても美術館は良い。近隣の式場で挙式された方を1年後に企画展に招待するなどのタイアップも良いのでは。

【生活環境文化部次長】

いただいたご意見について学芸員をはじめ美術館において予算化に向けてしっかり考えるが、部としても予算に反映できるよう来年度、再来年度に向けて一所懸命に取り組んでまいりたい。

【館長】

多くのご意見をいただき感謝申し上げます。いただいたご意見をしっかりと受け止め、本庁とも十分相談しながら、よりよい館となるよう頑張っていきたい。

文書でいただいた委員意見

【J 委員】

「東野芳明と戦後美術」展：戦後の日本美術史と富山の関わりを伝える良い企画だと思った。来場者はアートの鑑賞と同時に、富山という地域とアートとの深い関わりと文化的価値を再発見できたのではと思う。

「石岡瑛子展」：今でも誰も越えることができない素晴らしい功績の作品で、関心の高さは来場者数に表れている。作品が本来持つ集客の力はもちろんだが、期間中に魅力的なイベントを複数回企画実行されたことが、多くの人の関心を集めた要因と考える。

「絵本のひみつ」展：今では大人となった世代も含む多くの子どもたちが知っている定期刊行書籍「こどものとも」は、親世代と子どもが同時に関心を持ち親しめるテーマである。とても良い企画だと思った。この企画展についても、期間中に魅力的なイベントを複数回企画実行されたことが、多くの人の関心を集めた要因と考える。

「ポップ・アート」展：レトロブームが長く続いている背景から、60年代以降のポッ

プ・アートは親しみやすく来場者の関心が高いテーマだったと思う。

コロナ以降は日本人の国内観光はもとより、海外からの観光客が増えた。これは体験に関する価値観の高まりであり、コト文化の醸成、心の充足欲求の高まりという解釈もできるかと思う。各企画展は、その機運を捉えて多くのイベントを企てたことで、観客の「興味関心を持つ」という状態から「来場する」というアクションへ繋がったと思う。イベント開催には苦勞が多いと思うが、体験はアートを身近に感じる入り口という重要な手法として、引き続き来年度も計画されることを期待している。